

2016 年度後期早稲田大学雄弁会

2 月合宿研究レジュメ

はざま

文学部 2 年 杉田純

—心は己の場所を持ち、その内側に疑獄から天国を、天国

から地獄をつくり出す。—

—ジョン・ミルトン『失樂園』—

目次

社会認識

理想社会像・問題意識

本稿の主眼・最終目的

いじめの定義

本稿における考察の方法論について

群生秩序について

スクールカーストの形成過程について

いじめによる全能感

与えられた役割の影響

聖域化された学校

政策

終わりに

参考文献

社会認識

現代は多様な価値観を受け入れようとする社会である。敗戦を機に従来の言論統制・思想統制は廃され、報道や出版が規制を受けなくなったことにより、人々はより多様な価値観に触れたりたり表明したりすることができるようになった。国内で多様な価値観を受け入れる基盤が整ったのである。

また、戦後復興と高度経済成長を経て第二次産業や第三次産業も発展したことで国内に従来よりも多様な職業が生まれ、人々が選択し得るライフコースの幅も広がったと言える。どこで、どのように、誰と生活するかを人々が自由に取捨選択することが可能になり、その多様性も圧倒的に広がったのである。

しかしながら、従来とは大きく変化しなかった点もあった。その一つが学校の在り方であ

る。科目の変化や六三三四制への移行などの変化はあったが、就学期の子どもが学校に通い、不特定多数の子どもとともに集団生活を送るといふ学校制度の構造自体は変わらなかったのである。この学校制度の構造は戦前期に形作られたために、その内実も戦前期とは大きく変わらなかった。

だが、旧態依然とした学校には次第に人々から問題視される部分が出始めた。顕著な例はじめである。いじめ自体は数値等の記録には残っていないが、その性質に鑑みれば今日「いじめ」と称される現象はおそらく従来から存在していたであろう。大きく異なる点は、その現象が「いじめ」とは人々から捉えられなかった点である。当時の価値観に照らし合わせればそれはさしたる問題ではなかったのである。しかし、価値観の多様化によってその現象は「いじめ」と名付けられ、社会問題として扱われるまでになったのである。1986年の中野富士見中学校におけるいじめ自殺報道を皮切りに、いじめがメディアでも大きく取り上げられ、世論の注目を集めた。

いじめ問題が大きく取り上げられる度に政府も対応を迫られ、2013年にはその前年に発覚した大津市のいじめ自殺を受けて遂にいじめ防止対策推進法が制定された。その他にもいじめホットラインの創設やスクールカウンセラーの設置などの対応はなされてきたが、いじめの報道はやむところを知らず、全く解決されきっていない現状がある。

理想社会像・問題意識

私の理想社会像は「安心できる社会」である。安心とは自己肯定感を得られている状態である。自己肯定感を得るためには他者から承認される必要がある。承認とは相手の性質を肯定し、受け入れることである。ここでいう性質には内面的なものも外面的なものも含まれる。また、承認は継続的且つ相互的になされる必要がある。

私の問題意識は「いじめ」である。いじめとはある人や集団が別のある人に対して肉体的・精神的に望まないダメージを与えることである。いじめを受けている人は他者から承認されていない状態にあり、自己肯定感を得られない。したがって安心できていない。

本稿の主眼・最終目的

本稿ではいじめの解決策を考察していく。しかし、当然一口にいじめを解決するとは言っても様々な解決策が志向され得る。どのような解決策を採るかということは、「いじめ」という非常に実態を掴みづらいものをどのように捉えるのかということにも関連してくる。例えば特にいじめによる自殺を問題視するならば、被害者の自殺に発展し得る重大ないじめに焦点を当てて、自殺には至らなかったいじめと比較した上でその特異性を導いてそれに応じた解決策を構築することになるだろうし、いじめによる被害者の心理的負担を問題視するならば今度は被害者のケア・サポート体制にメスを入れるようなことになることが想定される。端的に言ってしまえば解決の方向性がかなり多岐にわたる。

では、本稿ではいじめをどのように解決しようとするのか。前述の通り、筆者の理想社会

像は「安心できる社会」である。個々人が他者から承認されることを最も重要視しており、いじめ問題に当てはめれば「子どもが他者から承認される」ことが最重要事項であると言える。この点に鑑みれば、本稿におけるいじめの最も注目すべき問題性はいじめの被害者である子どもが承認を受けられないこと、さらに具体的にはいじめという形で学校という世界において排除や不当な扱いをされることであると言える。

現行の教育制度における学校は不特定多数の子どもを 1 か所に集め、実質集団生活を強制している。彼らに共通するものは同年代であるという点と（公立小中学校においては）同じ地域に居住しているという点のみで、実に十人十色の子どもが集結させられている。いわば様々な人間が生活する一般社会のひな型としての学校社会が成立している。このような状況のもと、何らかのきっかけでいじめのターゲットにされた子どもが心理的・肉体的負担を強いられながら日常生活を送らなければならないことになってしまう。学校という小社会が自らの敵に回ってしまっているわけである。

したがって、本稿ではどんな子どもでも排除や不当な扱いを受けずに、いわゆる「普通に」日常生活を送ることができる教育機関を作り出すことを最終目的とする。

その際、留意しなければならない点は、現行の教育制度によって担保されており、尚且つ子どもの成長過程に不可欠と思われる要素は残しつつ新たな枠組みを提言する必要があるという事である。筆者は教育制度において担保されるべき点は(1)子どもが成長し、実社会に出た時に必要となる一般知識・教養を身に付けられる場の保障、(2)子どもが同年代の子どもたちと人間関係を育む場の保障の 2 点であるとする立場を取る。したがってこの 2 点は政策を提言する際にも留意すべき条件になる。

いじめの定義について

本格的に考察に入る前にいじめの定義について言及せねばならない。本稿におけるいじめの定義は以下に示す文部科学省が定めるいじめの定義¹に則るものとする。

「いじめ」とは、

「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的、物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。」

とする。

なお、起こった場所は学校の内外を問わない。

（注 1）「いじめられた児童生徒の立場に立って」とは、いじめられたとする児童生徒の気持ちを重視することである。

（注 2）「一定の人間関係のある者」とは、学校の内外を問わず、例えば、同じ学校・学級や部活動の者、当該児童生徒が関わっている仲間や集団（グループ）など、当該児童生徒と

¹ 文部科学省ホームページ <http://www.mext.go.jp/ijime/detail/1336269.htm>

何らかの人間関係のある者を指す。

(注3) 「攻撃」とは、「仲間はずれ」や「集団による無視」など直接的にかかわるものではないが、心理的な圧迫などで相手に苦痛を与えるものも含む。

(注4) 「物理的な攻撃」とは、身体的な攻撃のほか、金品をたかられたり、隠されたりすることなどを意味する。

(注5) けんか等を除く。

上記の内容が筆者の見解と齟齬がなく、且つ社会でも広く用いられているという点に鑑みてこの定義を採用することが適当である。

また、本稿で扱ういじめは学校における（無論学校の敷地内に限定するという意味ではない）子ども同士のいじめである。職場等において大人同士でもいじめは存在するが、学校におけるいじめはそれらとは性質を異にしており、尚且つ最も深刻性があるものであると考える故である。通常、一般社会においてはある1つのコミュニティ内でいじめなどの人間関係のトラブルが発生しても、被害者はコミュニティからの離脱、コミュニティの移動が可能である。転職などがそれに当たる。また、そもそも一般社会は学校のように限定化されたコミュニティではないため、ある人物との間に摩擦が生じたところでその人物との接触を避けることや全く別の場所で別の人間関係を構築することなども可能である。換言すれば、1人1人との個別の関係自体はそれほど濃密なものではない。

これに対して学校における人間関係は大きな変化が生じにくい。まず、コミュニティの離脱や移動に関してだが、転校やクラス替えなどの制度が存在してはいるものの、現実には子どもの意思でのみ転校することは非常に困難であるし、クラス替えは後に詳述するが、それはあくまで学校内における非常に限定的な人間の移動であり、再び同じ人間と同じクラスになったり、他クラスであった人間にも自らの情報が知れ渡っていたりして人間関係のリセットにはあまり意味をなさない。同様の理由で特定の人物との接触を避けることや全く新たな人間関係を築くことも困難である。端的に言うといじめから非常に逃れにくい環境が学校の中には出来上がっている。

この人間関係変化の不自由さはいじめの発生や発展に大きく影響し、その深刻性は一般社会におけるそれより高いと言える。故に学校におけるいじめを本稿では解決すべき事象とする。

本稿における考察の方法論について

(例I) YのクラスではHがいじめられていた。Hがいじめられ始めた理由は不明である。朝からクラス全員でHを無視する、教科書を塗りつぶす、ノートを破る。体育着や上履きをトイレの便器に入れるなど、かなりハードないじめである。Yもいやいやながらこのいじめに参加していた。しかし、ある日クラス全員が順番にHに

「死ね」と言うという話になり、Y は自分の順番になったがどうしても言えなかった。次の日、H が笑いながら Y に近づいてきて「お前、キモいんだよ。死ねよ。」と言った。いじめの対象者が H から Y に変わったのである。²

本稿ではいじめが発生する原因を、子どもを取り巻く外部環境に見出す。詳述すると、学校やクラスの構造やそこから生じる内輪の秩序やスクールカーストの発生、またそれらを生み出す根本的な教育制度などに着眼していく。いじめが「どのような子にでも起こり得る」ことは現在では周知の事実である。いじめ自殺などが報道されるといじめの首謀者であった子どもが典型的な不良のような子どもではなく、むしろ学校や塾では優等生として振る舞っていた子どもであったなどということも珍しくはない。また、いじめる、いじめられる、という立場も固定されたものではなく、いじめっ子といじめられっ子の逆転現象もしばしば起きる（例 I）。学校やクラスがある意味で「寄せ集め」である以上、特定の性質の人間しか集まっていない、ということは考えにくい。それにも拘わらず全ての、と言っても過言でないほど多くの子どもがいじめに何らかの形で巻き込まれるのはその原因が彼等を取り巻く外部環境にあるからではないだろうか。

また、この手法を採る理由はもう 1 点ある。本稿ではいじめに対する政策を提言する。政策によって直接変えることが可能なものはシステムそのものである。いじめの現認を個人の性質に見出すことも可能ではあるが、政策はしよせん個人の心情や思考を直接変えるなどということはできない。個人の内部に影響を与える環境要因やさらにそれを生み出すシステムを明らかにし、そのシステムを政策によって変化させることでいじめの解決にアプローチしていくことが適当である。

群生秩序について

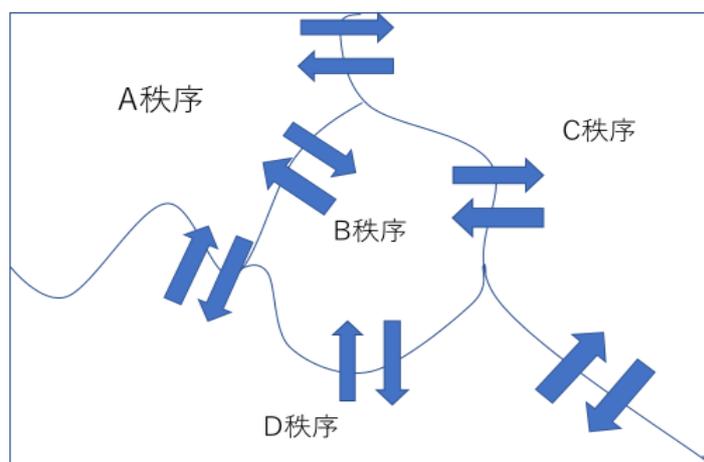


図 1 群生秩序の図³

² 森口朗『いじめの構造』（2007、新潮社）p.37

³ 内藤朝雄『いじめの構造 ―なぜ人が怪物になるのか―』（2009、講談社）p.33 図 1

いじめとは何か、と言われて端的に答えるのであれば「空気」であると言えよう。社会学者・内藤朝雄は『いじめの構造 ―なぜ人は怪物になるのか―』の中で群生秩序の存在を指摘している。人間は常に 1 つの秩序だけに縛られながら生活しているのではなく、複数の秩序がある中で、状況に応じて優先する秩序を変化させている。複数の秩序の中には法や一般的な倫理観などある程度普遍的であるとされるものから、暗黙の了解やローカルルールなど、内輪の論理であるものまである。それを表したのが上記の図 1 であり、それぞれの秩序は互いにせめぎあい、一方が大きくなれば一方は小さくなる。「どういうタイプの秩序が優位であるかによって、現実感覚は刻々移り変わり、何が『あたりまえ』か、何が『よい』と感じられ何が『悪い』と感じられるかも変化する。複数の秩序に応じて、複数の『よい』『悪い』が生じる⁴⁾」と内藤は述べており、秩序の変化が行動や価値判断の基準の変化になると言える。学校内の子どもも同様に複数の秩序の中を生きており、彼らが最も重視するのが「『いま・ここ』のノリを『みんな』で共に生きるかたちが、そのまま畏怖の対象となり、是／非を分かち規範の準拠点になるタイプの秩序⁵⁾」であり、これを内藤は「群れの勢いによる秩序、すなわち群生秩序⁶⁾」としている。子どもたちはいじめに興じている時、この自分たちだけの群生秩序、俗的に言えば「ノリ」に則って、正しい行為であるとして行為に及んでいる。この時「人を不当に貶めてはならない」という道徳や、「他人への暴力行為や恐喝は犯罪である」とする法律などの一般的な秩序は彼らに通用しない。彼らにとってそれは優先されるべきものではないし、その場でそれら普遍的秩序を持ち出すのは場違いでしかない。だからこそいじめっ子は「遊んでいるだけ」などと口走れるし、事実そのように思っている。

さらに、このいわゆる「ノリ」に乗らない子どもはいじめの対象になる。ノリに乗らないということは子どもたちの間の秩序、そう群生秩序に反するということを意味するからである。彼らにとって群生秩序を守らないことは悪であり、群生秩序に反した子どもは異端者であり、その異端者をいじめることは正義である。当然、法や道徳など別の秩序を優先しようとするのも悪、つまりそれらを持ち出す教師や大人も彼らにとっては忌避すべき対象になってしまう。

つまり、いじめとは子どもだけの秩序の下で行われており、その秩序は「ノリ」のようなもの、そう、空気である。子どもたちの中に群生秩序という空気が広がり、それに支配されていじめが発生するのである。

スクールカーストの形成過程について

を参考に筆者作成

4 内藤朝雄『いじめの構造 ―なぜ人が怪物になるのか―』（2009、講談社） p.34

5 内藤朝雄『いじめの構造 ―なぜ人が怪物になるのか―』（2009、講談社） p.35

6 内藤朝雄『いじめの構造 ―なぜ人が怪物になるのか―』（2009、講談社） p.35

			同調力		
			高い	低い	
自己主張力	高い	共感力	高い	スーパーリーダー	栄光ある孤立
			低い	残酷なリーダー いじめ首謀者候補	「自己中」 被害者リスク大
	低い	共感力	高い	人望あるサブリーダー	「いい奴なんだけど…」 被害者リスク中
			低い	お調子者 いじられキャラ いじめ脇役候補	「何を考えているんだか…」 被害者リスク大

表7

前項では群生秩序について言及した。子どもたちの中に秩序が出来上がれば次にできるのは身分の違いである。学校における子どもたちの身分秩序と言えは真っ先に想定されるのがスクールカーストであろう。学校におけるいじめを考える際、無視できないものがスクールカーストの存在である。スクールカーストとは公的に認められてはいないが、論文や著書などで一般的に指摘されている概念であり、学校内や学級内における子どもたちの序列や身分を指している。このスクールカーストが子どもの中で一種の秩序として機能しており、いじめなどの人間関係にも大きな影響を与えている。森口は「スクールカーストは単に高低だけでなく、各人のキャラクターに応じてそれぞれに期待される役割を与え⁸」ると指摘しており、子どもたちの役割はスクールカーストに規定されるとしている。

このスクールカースト自体はどういった基準で規定されているのであろうか。森口はスクールカーストをコミュニケーション能力によって決定されるものとし、さらにコミュニケーション能力は「自己主張力」「共感力」「同調力」の三次元マトリクスで決定されるとしている。それを表したのが上記の表である。特に「同調力」に欠けるといじめの標的にされやすくなるということがわかる。

また、スクールカーストは容易には変化しない。厳密に言えば、下がるのは簡単だが上がるのは難しい。

クラス替えくらいだと、もういろんな噂が耳に入ってくるので。知ってるから、人伝えに聞いたりとかけっこうあるから、クラス替えでは、やっぱそこはどうにもならないとは思いますがね。やっぱ、前のクラスで強かった子は、次のクラスでも強いって

⁷ 森口朗『いじめの構造』（2007、新潮社）p.45 図表 3

⁸ 森口朗『いじめの構造』（2007、新潮社）p.45

いうのは、普通ですよ。 ⁹

はじめに第一印象で下になっちゃった人って、そこから上がる人オレは見たことがない。 (中略) 下がるのはよくあるんですけど。下がるのはいくらでもいるんですけど、上がるっていうのはオレは一度も見たことがないと思います。(中略) クラスは変わりますが、やっぱり学校の中で、自分の立ち位置っていうのがもうできあがっちゃってるので、変えにくいですよ。しかもその別のクラスに過去の自分を知ってる人がいっぱいいるから、完全にその閉鎖された空間じゃないから、その放課後(授業)が終われば、部活やったりするわけだし、そこでクラスを超えた関わりもあるし、情報が漏れて(い)るから。 うん。 ¹⁰

上の2つの引用は『スクールカースト』において著者の鈴木翔が大学生に対して小学校から高校までのスクールカーストの変化について質問した際の、大学生2人の回答である。共通しているのはクラス替えを行ってもしよせん学校内での事のため、自分の情報が同級生に知れ渡っておりスクールカーストに変化は生じないという点である。さらに、スクールカーストは一回規定されてしまうと変化が生じにくいことでも共通性を見出せるが、2人目に関しては上昇という変化は生じないと述べている。

以上をまとめると、スクールカーストはコミュニケーション能力、特に同調力に規定され、それが低いといじめられるリスクが高まり、尚且つ一旦低い立場になると上昇させることは困難であるということになる。

いじめによる全能感

いじめの背景に群生秩序:「ノリ」と身分秩序:「スクールカースト」が存在することはわかった。では、結局なぜ子どもはいじめをすることにまで及んでしまうのであろうか。内藤は群生秩序、群れの中の情報が子どもの内的モードに変化を生じさせるとしている。この内的モードの変化とは、先ほど述べたような行動や価値判断の基準になる秩序の変化である。

「ひとりやったらできへんし、友だちがいっぱいおったりしたら、全然怖いものないから。何かこころもち気が強くなるっていうか、人数が多たってことは、安心する、みたいなんで。一回いじめたら止められなくなるっていうかな」

「友だちに『あのひと嫌い』って言われると、何かそれ、うつっちゃうんですよ」 ¹¹

この証言は周囲の状況や言動に本人の思考や行動が感化されていることを示している。

⁹ 鈴木翔『スクールカースト』(2012、光文社) p.191

¹⁰ 鈴木翔『スクールカースト』(2012、光文社) p.193-p.194

¹¹ 内藤朝雄『いじめの構造 ーなぜ人は怪物になるのかー』(2009、講談社) p.57

この時まさに、思考や行動を変えた人間の内部モードが変化しているのである。例えば学校の外、塾やバイト先などでは一般的な秩序に従っているのに学校で友達と一緒にになると突然先ほどの群生秩序に従い始めて一般的な秩序に照らし合わせれば決して許されるようなことがない言動に走ってしまうのである。つまり、ここにおいて子どもの行動が周囲の環境、群生秩序に左右されてしまうことが裏付けられる。

そして、一度いじめに興じた子どもには全能感という甘い果実がもたらされる。全能感は漠然としたいらだち、むかつき、おちつかなさなどの不全感の逆転感覚として生じる。いじめとはいわば他人を自分の意のままに扱うことである。そうすることによって漠然とした不全感を一時的に払拭し、自分が力に満ちているかのような全能感を味わうことができる。

「むしゃくしゃしたから殴った」という行動の原理である。内藤は特に「自分とは別の意思を有しており、独自の世界を生きている」からこそ、「いじめ加害者は、他者の運命あるいは人間存在そのものを、自己のうちで思いどおりにコントロールすることによって、全能のパワーを求める」としている¹²。つまりは通常であれば思い通りに動かすことができるはずのない他人をいじめという自らの行動によって服従させる、あるいは表情をゆがませたり悲鳴をあげさせたりすることによっていじめの加害者は全能感を得るのである。また、被害者が加害者の命令を拒否しようものなら「全能感を侵された」と加害者は感じてさらなるいじめに走る。内藤はこれを「全能はずされ憤怒」と称している。

以上より、いじめによって加害者は全能感を得られるという利点があるということがわかった。

与えられた役割の影響（ルシファー効果）

ここまで主に学校内・クラス内の環境（群生秩序やスクールカースト）にいじめの原因を見出し、それらが子どもの内面に与える影響を考察した。システムが人の心を支配するということが裏付けた心理学実験があるのでそれをここにも記しておきたい。それはスタンフォード大学心理学名誉教授・フィリップ・ジンバルドによる「スタンフォード監獄実験」である。

スタンフォード大学の地下に本物と近似した模擬監獄をつくり、心身ともに正常な男子大学生 20 名を無作為に囚人役と看守役に振り分け、監獄内の規則なども定めた上で収監生活を再現したものである。当初は 2 週間続けられる予定であったが、離脱者が相次いだことや看守役による囚人役への暴行や虐待がエスカレートしたことを受け、1 週間もしない内に中止された。この実験は学校におけるいじめを考察する際にも非常に示唆的な視座を与えてくれている。

まず、いかに人間が自らに与えられた役割に沿って行動してしまうのかを示している。看守役は実験前のオリエンテーションで「囚人に『これは単なる実験だ』と思わせてはいけない。囚人役が本当に刑務所に閉じ込められている気分になるよう演出しなければならない」

¹² 内藤朝雄『いじめの構造 ―なぜ人は怪物になるのか―』（2009、講談社）p.76

と実験者に伝えられ、本物の看守らしく振舞った。即ち昼夜を問わず囚人を呼び出して整列させた上で点呼を取ったり、囚人に何らかの命令を出し、反抗したりミスをしたりに腕立て伏せなどの懲罰を与えるなどした。実験は日曜日の午後に開始されたが、最初、囚人役たちは看守役たちに対して反抗的な態度をとっていた。しかし、看守役の度重なる命令や懲罰を受けるにつれ、次第に「囚人」という与えられた役割にはまり、看守役にどんな理不尽な命令をされても従うようになった。つまり、ずっと「制裁を加える」「制裁を加えられる」役割が固定され、その役割に求められる行動をするうちにその役割に没頭してしまったのである。看守の方は当然のように囚人に制裁を加えるようになり、理不尽な命令、言いがかりによる制裁なども見られた。囚人の方も多少の抵抗を見せることはあったものの、概ね看守の命令は理不尽なものであっても従うようになった。特筆すべきは、看守も囚人も途中で実験を降りる権利は事前に認められており、「実験を降りる」と言えばその状況から脱することは可能であった。だが、囚人は自分からは降りることがなかった（監督者の判断で途中離脱になる者はいた）。完全に看守も囚人も自らの役割にはまりきっていたのである。

また、この事例にはもう1つの側面がある。「いつでも実験を降りる権利がある」というのはあくまで監獄の外の世界にいた時に交わした契約であり、つまりごく一般的なルールの話である。しかし、監獄の中には「看守や管理人の言うことが絶対である」という監獄内みのルールが存在していた。囚人はこの監獄内みのルールに完全に染まり、一般的なルールを適用するという発想が出なくなってしまうのである。これはまさに群生秩序の項で述べたことと重なる。非実験者（看守と囚人）の内部には一般的なルールも監獄内ルールも存在してはいたが監獄の中にいるうちは監獄内ルールが最も遵守すべきものになっていたのである。群生秩序にせよ、この監獄内ルールにせよ、人間がいかにか「内輪の論理（倫理）」に従いやすいかを裏付けている。

さらに、ジンバルドーの後の妻であるクリスティーナが実験5日目（実験打ち切りの前日）に模擬監獄を訪れた際の状況を以下のように振り返っている。

刑務所のある地下へと階段をくだり……通路の一番奥まで行きました。（中略）勤務開始を待っている看守がひとりいたので、話をしました。明るくて丁寧で愛想のいい、誰もが“好青年”と認めるような人物でした。しばらくして、刑務所内をもう一度観察してはどうか、とある研究スタッフに勧められました。（中略）でも、隠し窓から所内を覗いて愕然としました。ジョン・ウェインというのは、さっきおしゃべりした“好青年”だったからです。ただし、もはや別の人物に変身していました。動き方だけでなく、話し方も前とは違って、言葉に南部なまりがにじんできています……囚人に点呼をとらせながら、怒鳴ったり罵ったりして、喧嘩腰の粗暴な態度で歩き回っています。つい先ほど言葉を交わした相手とは思えない、驚くべき変貌ぶりでした。外の世界から刑務所へと一線を越えてから、まだ何分かしか経っていないのに、別人になったのです。軍隊風の制服を着て、警棒を握り、ミラーサングラスで目をおおい……職務に徹して、隙ひ

とつない、本当に陰険な看守でした¹³。

以上の回想から、実験参加者の大学生が模擬監獄の中と外でいかに内面に変化を生じさせるかを物語っている。これも「優等生として振る舞っていた」生徒が「クラスではいじめにふけていた」パターンと構造が同じである。この大学生の場合も外でクリスティーナに会った時には一般的な秩序に従って「愛想よく話をした」のだが、一度模擬監獄に入ってから一般的な秩序などどこかへ置きやり、囚人をいたぶる看守としての役割に没頭するわけである。おそらく彼の内部では秩序の転換が起き、それに応じて言動にも変化が生じたのであろう。クリスティーナの回想からは人間は自分の役割にはまり込むということと、個人内部の秩序やそこから生じる言動は簡単に変わり得るということがわかる。

聖域化された学校

群生秩序などの内輪の論理（倫理）が働くといじめに悪影響が出るのは既に述べた通りである。このような内輪の論理（倫理）が大きくなったり、そもそも出来上がったりするには学校の構造や体質にも問題があると言える。現在は学校がそもそも一般的な倫理が入りにくい場所になってしまっている。

三輪中学校や地元教育委員会は、事実関係を調査するといいながら、有効な調査を怠り、遅らせ、さらに政府から派遣された人員に対しても非協力的であった。三輪中学校父母教師会は全校生徒に「私は取材を受けません」と書かれたオレンジのカードを配布した。事件後、保護者を集めた学年集会で、学校側は会のはじめに「精神的にリラックスしましょう」といって、リラクゼーションのための体操をやらせた。（中略）「地元では取材に応じるなという圧力が強く、取材がたいへんむずかしい。いろいろな人間関係や組織や団体のつながりがからみあっていて、それが隠蔽の方向に強く作用しているようだ。A君の親も、加害生徒を告訴すると地元で生きていくのがたいへんになりそうな気がする。われわれも長期にわたって地元で張りついていることができない。このまま、うやむやにされてしまうかもしれない」とB氏（筆者注：ある週刊誌記者）は語った。¹⁴

これは2006年に三輪中学校の2年生A君がいじめによって自殺した後の対応である。政府や警察、マスコミといった公権力やメディアが介入してくるのを避けようとする意図が明白である。これはもちろんほんの一例に過ぎない。子どもが自殺し、それにいじめが関係している可能性があっても「わが校にいじめはなかったと認識している」というのは学校側の常套文句になっていると言っても過言ではない。また、この三輪中学校における例では

¹³ フィリップ・ジンバルド『ルシファー・エフェクト ―ふつうの人が悪魔に変わるとき―』（2015、海と月社）p.281-p.282

¹⁴ 内藤朝雄『いじめの構造 ―なぜ人は怪物になるのか―』（2009、講談社）p.21

学校のそういった姿勢に地元も協力している様子うかがえる。

政府や警察の介入を防ぐということは、一般的な秩序を学校の中に持ち込むことを防ぐという面も持つ。つまり、学校が「特別な場所である」ということになってしまい、ますます内輪の理論（倫理）が醸成されることにも繋がる。

いじめの中でも著しい暴力行為や恐喝などの金銭が絡むものは本来刑事事件として扱われてよいものである。しかし、そういったものでさえも学校の中で起きると「いじめ」として処理され、うやむやな対応に終始してしまうことさえある。

学校の中に公権力のような一般的な倫理が入ってこないとなれば当然子どもとしてもそれを考慮する必要性は下がる。それは群生秩序に従う温床になってしまう。逆に一般的な倫理が学校内に及ぶとなればそれは刑事事件のレベルになるいじめをする枷になり得る。

政策

短期的政策

○クラス制の撤廃

現状のいじめ発生の温床となっているのがクラス制である。30～40人の子どもを寄せ集め、有象無象の不安定な空間が形成されるだけならまだよいが、そこにいわば閉じ込められた状態になってしまうのが現状の教育制度である。不安定な空間に閉じ込められ、共同生活を強いられるからこそ、群生秩序やスクールカーストなどのある種自然発生的でローカルな秩序が出来上がってしまい、その枠組みのもとでいじめが行われる。

比較的短期的に行える政策はこのクラス制を廃し、現在の大学のように授業ごとに生徒が移動するようにすることである。授業ごとに教室内の顔ぶれが異なるようになり、尚且つ授業が終われば解散するため、教室内のアクターに流動性が生まれる。アクターが固定的でなくなれば固定された秩序が生まれにくくなる。

あくまで学校内における移動のためにアクターの変化には限界があるが、短期的に捉えるのであれば十分である。従来いじめ被害者であった子どもも授業ごとにアクターが変わる環境であれば会いたくない人間から意図的に「逃げる」「避ける」こともある程度可能になる。一見限定的な政策に思えるかもしれないが、現状のクラス制の不健全さや被害者が逃げにくい構造を考えれば大幅な前進になると言える。

○校内トラブルの外部共有絶対化

さらに、学校が聖域化されて一般的な倫理が通用しにくくなっている点に対しても政策を打つ必要がある。恐喝や暴力行為など刑事事件になるレベルの行為はもはや「いじめ」ではない。むしろ「いじめ」とカテゴライズしてしまうことによって子どもたちに「犯罪である」という意識が生まれにくくなり、群生秩序の拡大を招くだけである。

この点に対しては警察と学校が学校内で起きた子どものトラブルを共有することを義務付けることで解決を図る。これは大きな事件に発展した時のみでなく現在学校内で処理し

てしまうような小さなトラブルも情報共有の対象にする（ただし必ずしもその度に警察が出動することを意味しない）。普段から警察という公権力が学校内に関わることで一般的な倫理が学校の中に入り込む土壌が出来上がる。本当に刑事事件レベルのいじめが発生した時法という一般的な倫理の下で子どもの処分を決めることができる。

また、そもそも普段から警察と緊密に連携していて本当に連行されるリスクがあるとなれば子どもとしても従来通りに犯罪レベルのいじめにふけることは難しくなる。いじめの抑止力としても有効な手段なのである。

中長期的政策

○新たな教育制度創設

本稿でここまで見てきたようないじめを発生させるシステムを根本的に変えようと思つたら現行の教育制度を一度解体して新たな枠組みを作り出す必要がある。無論それは多大な時間と労力を要するであろうことが想定される。故に本稿では中長期的政策と位置づけ、その方向性を示す。

学校におけるいじめと一般社会におけるいじめの最大の差は「逃げ道」の有無である。本稿の序盤で述べた通り、現在の学校は非常に閉鎖的な空間のために子どもがいじめから逃れようと思つても逃れることは容易ではない。クラス替えはいじめっ子と同じクラスになる可能性を孕むし、転校という手段は存在するが、本当に子どもの意思だけで転校をする例はおそらくあまりない。学校は壁のない檻のようなものなのである。

より学校の在り方が多様になり、尚且つ学ぶ子どもたちが学校内、学校から学校を今よりも自由に行き来することができるようになれば、いじめが発生しやすい閉鎖的な空気を排除できるばかりか、学びの幅も広がるかもしれない。あるいは六三三四制に拘ることもなくしていいのではないか。現在様々なタイプの学習塾が存在するように、学校の在り方も1つに拘らずに幅広い在り方を実現することで子どもがより自分に合った環境を見つけ出すことができるかもしれない。

終わりに

本稿では現状の学校制度の下でいかにしていじめが発生するのかということと、そのメカニズムは学校制度の構造そのものに起因していることを示した。結局それらを解決しようとする現行の教育制度を大きく変えることを意識しなければならない。いじめの定義について述べた通り、学校の中に出来上がっている社会は大人になった後活動する社会とは大きく異なる。どうあがいても学校やクラスは社会のひな型であり、そこに生じる社会はしよせん箱庭に過ぎない。トラブルが生じた時にそれを回避し、自らの生き方を歩むという実社会では当然のように選択できることを学校の中では選択できない。そこに逃げ場所などは本当の意味では存在しない。

だからこそ、最後に述べた政策では非常に抽象的ながらも教育制度の変革に言及させて

頂いた。学校が、子どもたちが社会生活を学ぶ場であるのなら、より実社会に近づけた、自由度の高い環境をつくり出してもよいではないか。今のように馴染みのクラスの中で気の合う友人を見つけ、日常生活を送るということはなくなるかもしれないが、より自由な環境で自ら活動して人間関係を構築していくことは結局学校を卒業した後に否が応でもしなければならないことである。早期からそれと変わらない環境に子どもたちを置くことも一つの教育の在り方である。

最後に、本稿の題名について触れておきたい。「はざま」は勿論、あるものとあるものの間、という意味での「はざま」である。繰り返すが本稿はいじめが起きる原因を子どもたちを取り巻く環境に見出そうとしていた。つまりは人間の心理は元々善悪の属性はなく、ニュートラルな存在であるが、それが外部環境の影響で悪にも善にも変わり得る。人間は常に善と悪のはざまの存在である、という意味をこめて本稿の題名をつけさせて頂いた。

参考文献

鈴木翔『^{スクール}教室内カースト』(2012、光文社)

内藤朝雄『いじめの構造 ―なぜ人は怪物になるのか―』(2009、講談社)

フィリップ・ジンバルドー『ルシファー・エフェクト ―ふつうの人が悪魔に変わる時―』(2015、海と月社)

森口朗『いじめの構造』(2007、新潮社)

文部科学省ホームページ <http://www.mext.go.jp/ijime/detail/1336269.htm>